

中学校における安心して自己表現できる学級づくり

ーグループアプローチを中心的な手立てとしてー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 深澤暢子

1. 背景

学級経営に関しては、近年その重要性が叫ばれており、中央教育審議会（2016）の中では、子どもの発達を踏まえた指導の一つとして、学級経営は学習活動や学校生活の基盤であると位置付けられている。また、山梨県教育委員会においても、学級経営の充実は、確かな学力・豊かな心・健やかな身体の育成を貫くものとして、指導重点に位置付けられており、集団作りの取り組みが求められていることが分かる。ここでは、集団作りの柱として、学習活動づくり・人間関係づくり・環境づくりの3つが示されている。

さらに、生徒指導提要（2022）を見てみると、第Ⅰ部生徒指導の基本的な進め方、第1章生徒指導の基礎、1.1 生徒指導の意義、1.1.2 生徒指導の実践上の視点、（2）共感的な人間関係の育成の中に「学級経営・ホームルーム経営（以下「学級・ホームルーム経営」という。）の焦点は、教職員と児童生徒、児童生徒同士の選択できない出会いから始まる生活集団を、どのようにして認め合い・励まし合い・支え合える学習集団に変えていくのかということに置かれます。失敗を恐れず、間違いやできないことを笑わない、むしろ、なぜそう思ったのか、どうすればできるようになるのかを皆で考える支持的で創造的な学級・ホームルームづくりが生徒指導の土台となります。そのためには、自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる相互扶助的で共感的な人間関係をいかに早期に創りあげるかが重要となります。」とある。

このように、学級経営の重要性の高まりとともに、学級の中で良好な人間関係を築いていく

ことは、学級担任として果たすべき重要な役割であると言える。

これまで筆者は、生徒同士が良好な人間関係を築くために試行錯誤してきた。しかし、その実践は十分なものとは言えなかった。学級経営に関しては、教科指導に比べて研修の機会が少なく、いざ学級担任になってしまえば、他の教員がどのように学級経営を行っているか、実際に見る機会も少ない。そのため、経験知に頼る部分も大きかった。さらに、学級の中の生徒の様相も多様化しており、担任として求められる対応も複雑化している現状があり、どのように働きかけるべきか迷うことも多かった。特に、生徒が学級の中で思うように自己表現できていないことに課題を感じていた。

中学生の自己表現と居場所感の関連について、安藤（2023）は、「居場所感高群に属する中学生は、自己表現に伴うポジティブ感情が多く、他者との調和を乱すリスクを冒しても言うべきことは言う傾向があることが明らかになった。また、居場所感中群に属する中学生は過度に人間関係の維持に腐心する傾向があり、居場所感低群に属する中学生はアサーティブな自己表現が少なく、感情に乏しい自己表現が多い傾向がみられた。これらのことから、中学生の、友人と居る場で安心して自由に振舞っているか、場面に則した感情表現ができているか否かは、教師など周りの大人が居場所感の高低を知る一つの指標になる」と示している。また、柴橋（2004）は自分の気持ちや考えを受けとめてくれる友人への信頼感が自己表明と関連することを示した。

これらを逆に捉えれば、自分の気持ちや考えが受け止められる体験や、生徒が安心して自由

に振舞える環境づくりをすること、場面に即した感情表現について学ぶことで、生徒たちがより安心して自己表現できる学級に近づくのではないかと考えた。

ここで、本研究が目指す学級像を明確にしておきたい。「安心して自己表現できる学級」を目指す上で、生徒が自分自身の気持ちや考えを大切にできることと合わせて、他者の気持ちや考えを尊重しようとする態度も不可欠であると考え。平木(1993)は、「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直にその場にふさわしい方法で表現し、そして相手が同じように発言することを奨励しようとする態度」を持っていることを「アサーティブな自己表現」とであると定義している。この定義には、自分の意見を表明することと合わせて相手の発言に対する態度も示されている。また、平木(2012)は、「自分も相手も大切にする自己表現」を「アサーティブな自己表現」とした。この平木(2012)をもとに、筆者が一部改訂し、本研究における「安心して自己表現できる学級」を次のように定義した。

- ①誰でも自分の考えや気持ちを素直に表現できる学級
- ②伝えたら、相手の反応を受け止めようとする学級
- ③異なる意見も尊重することができる学級

上記の学級像を目指した働きかけの手法として、グループアプローチに着目した。武蔵(2017)によれば「グループアプローチとは、グループに所属するメンバーの教育・成長をめざして体験学習が効果的に作用するように構成されたグループでの生活・活動体験のこと」だという。また「学校教育におけるグループアプローチの目的は①子ども一人一人の成長・発達②教師と子ども及び子ども同士のコミュニケーションの発展と改善③学級集団の開発や変革」であるとし、その効果として①体験の機会②行動・態度・感情の修正③意欲の喚起④意義と方法の獲得⑤個人の変容の促進の5つを挙げている。

本研究では、このグループアプローチを一方

法として、生徒たちが安心して自己表現できる学級づくりの実現を目指す。

2. 目的

本研究の目的は、中学校において生徒が安心して自己表現できる学級をつくる一方法として、グループアプローチを活用した授業ユニットを実践し、成果と課題を検討することである。

3. 方法

対象	山梨県内公立中学校（連携協力校） 3学年1学級28名
----	-------------------------------

(1)実態把握のための質問紙調査

調査日：2023年11月9日（木）

A4 両面1枚からなる、回答時間15分程度の質問紙調査を第3学年1学級に実施した。欠席者には後日時間をとって回答を依頼し、28の回答を得た。

倫理的配慮として、参加者には、参加せずとも不利益はなく、途中で中断も可能で、データ収集は匿名で行われ、個人が特定されないことを調査冒頭で説明した。

(2)学級活動・道徳における授業実践

グループアプローチの中にも、様々な手法がある。その例として、これまでも、学校現場で多く実践されてきた構成的グループエンカウンター（以下SGE）や、ソーシャルスキルトレーニング（以下SST）、また、近年学校現場にも取り入れられるようになったアサーショントレーニング（以下AT）などが挙げられる。SGEとはありたいようなあり方を模索する能率的な方法としてエクササイズという誘発剤とグループの教育機能を活用したサイコエデュケーションでありリレーションの体験と個の自覚を軸としている（國分，1994）。山口ら（2018）はSGEのエクササイズを通してふれあいが促進され、生徒同士に仲間意識が生まれることにより、安心して友達と関わるできるようになったと述べている。また、佐藤ら（2005）によれば、ソーシャルスキルとは対人関係を円滑に運ぶための知識とそれに裏打ちされた具体的な技術やコツを総称したものを指

す。それらのコツのモデルを示しリハーサルとよばれる体験を行う中でスキルを学ぶものがSSTである。中村ら(2018)は、平木及び日本精神技術研究所が開発したATプログラムを参考に黒木が中学生用に一部改良し、AT教育用プログラム(以下ATEP)を作成した。このプログラムは、中学2年生33名を対象に、総合的な学習の時間での選択講座として実施された。期間は約10か月で全16回からなるものであり、全体の概要は表1に示した。本研究で

は、目指す学級像にアサーションの要素が含まれていること、希望者ではなく学級全員が対象であること、実践できる時間が限られていることから、このATEPの導入的な部分を中心に、一部を取り入れ、SSTとSGEの要素も組み合わせ授業ユニットを組んだ。

(3)事後質問紙調査の記述分析による授業ユニットの成果と課題の検討

事後質問紙調査日：2024年1月19日(金)

A4片面1枚からなる、回答時間10分程度

表1 ATPE(第1回～第16回)の内容と各回のねらい並びに方法

中村ら(2018)

回	タイトル	ねらい	方法
1	オリエンテーション	自己紹介、志望動機の披露、及びATの概要と本講座の進め方について理解する。	ATの概要を説明した後、一人ひとり自己紹介となぜこの講座を選んだのかを述べ、この講座で学んでいく気持ちについて参加者全員で確認・共有した。また約束としては、参加する、参加したくない権利も尊重、個人攻撃はしない、守秘義務、時間を守ることを確認した。
2	アサーションとは	3つの自己表現の形である。攻撃的な自己表現、受身的な自己表現、アサーティブな自己表現の特徴を理解し、アサーティブな自己表現が相手に伝わりやすい自己表現であることを共通理解する。	攻撃的な自己表現、受身的な自己表現、アサーティブな自己表現の特徴を説明し、それぞれにアニメのキャラクターを当てはめてイメージを掴ませる。
3	3つの自己表現とその違い	3つの自己表現の特徴を踏まえ、同じ文章を見ても、人によって受け止め方は多様であることを理解し、人の感じ方の多様性について理解する。	各自で葛藤が起こりそうな課題文について攻撃的、受身的、アサーティブのどれか1つを選択し、その後4人程度のグループに分かれて自分が選んだ選択肢(攻か受かアサーティブか)を簡単な根拠を示して紹介していく。
4	具体的なアサーションの話し方	アサーティブな話し方について具体的にそのコツをつかみ、実際に使えるようになる。	指導者がアサーティブを意識していない攻撃的に感じやすい文章を提示し、この文章を「私は～」で始まる「私メッセージ」の文章に書き替えてみせ、アサーティブは伝え方を理解し、実際に自分で「私メッセージ」の文章を作る。
5	自己信頼とアサーション権	アサーティブな言動をするためには自己信頼感が重要であることと、アサーションの原動力であるアサーション権について理解し、自己表現は自分の選択で、「する」「しない」を決めてよいことを理解する。	自己信頼感の概要を理解し、アサーション権について理解した後、4人程度のグループになり、アサーション権を知っていたのか、知らなかったのか、もしも知っていたら、それを使っていたか、使えていなかったのかについてグループで各自の体験を出し合い、アサーション権についての理解を深める。
6	1学期の振り返り	1学期の学習を振り返り、アンケート用紙や自己評価を各自で記入し、1学期の本講座についての感想を述べる。	各自でそれぞれの用紙に記入し終えた後、1学期の感想を全員でシェアする。
7	アサーションと考え方	アルバート・エリスの論理療法について理解する。まず非合理的思い込みについて理解し、人の価値観や考え方の多様性について体験的に理解し、尊重する。	最初に各自で「考え方をチェックしよう」のワークシートにある9つの文章を読んだ後、自分の考えに最も近い選択肢(4件法)から簡単な理由づけを考えて1つ選ぶ。その後4～5人グループになり、各自チェックした理由を述べていく。その際、自分と違う意見や考えを尊重する。
8	ABC理論について	自己の考え方を考える方法としてABC理論について知り、実際に考え方を考える練習をする。	ワークシート「感情はコントロールできる」の「好きな人にふられた例」を見て、ABC理論の概要を理解し、ワークシートで「中間テストが悪かった場合」等についてABC理論を用いた考え方を考える練習を行う。
9	ABC理論で考えた文章を発表する	ABC理論についての理解を深める	4～5人のグループで前時で作成したABC理論で考えた文章をグループ内で披露し合い、その後グループで1つ全体で発表する文章を選び、全体で発表していく。
10	断る練習①	実際に断るロールプレイを行った後、断り方のコツを体験及びシェアリングから理解する。	最初に全員簡単な何らかの場面で断りたい場面を考える。この場面は難しいものは避ける。次に3人か4人グループになり、Aさん(頼む人)、Bさん(断る人)、Cさん(観察者)そして、4人グループの場合はDさん(観察者)を決める。原則として全員交代でロールプレイに参加する。ロールプレイ時間は3分程度、原則として途中で降りないこと。
11	断る練習②	実際に自分たちが断りたい場面を考え、ロールプレイで練習する。	「断り方」ワークシートを用いて、各自で断りたい場面を想定し、断り方の台詞を考え、ワークシートにする。その後3～4人のグループに分かれ、順番にロールプレイを演じて断る練習をする。
12	頼む練習①	実際に頼むロールプレイを行った後、頼み方のコツを体験及びシェアリングから理解する。	最初に全員簡単な何らかの場面で断りたい場面を考える。断る練習①と同様の準備を行い、本時は「頼む」ことを中心としたロールプレイで、頼むコツを理解することをめざした。「断る」人は「いや」「やりたくない」など気持ちを言わずに断ることで頼みやすい状況をあえて作った状態でロールプレイを演じる。
13	頼む練習②	実際に自分たちが頼みたい場面を考え、ロールプレイで練習する。	「やさしい頼み方」シートを用いて、各自が頼まなければならない理由や頼む際の台詞を考え、ワークシートに記入する。その後、実際に3～4人グループになって順番にロールプレイを演じていく。
14	トラブル解決を考えよう①	トラブル解決の重要ポイントを理解した後、各自で人間関係上で葛藤が起こりそうな場面をワークシートを用いて作成し、そのシナリオづくりを行う。	講義でトラブル解決のポイントを聞いた後、それを参考にして各自、ワークシート「トラブル解決を考える」を用いて自分の対人葛藤場面におけるシナリオを考えてワークシートに記入する。
15	前時で作成したシナリオに基づいて、ロールプレイを演じ、トラブル解決を考えよう②		前時に作成したワークシートを元にして3～4人グループで順番にロールプレイを演じた。振り返りでは、ロールプレイを演じた人のいいところだけをフィードバックする方法を採用した。
16	まとめ	アサーション・トレーニングを終えて、本講座への感想、アンケート、振り返り用紙を記入した後、全員、感想を述べる。	振り返り用紙、アンケート用紙(自尊感情尺度)を記入し、その後、感想を全員述べて、改めてアサーション・トレーニングのまとめを行った。

の質問紙調査を第3学年1学級に実施し、28の回答を得た。

倫理的配慮として、参加者には、参加せずとも不利益はなく、途中での中断も可能で、データ収集は匿名で行われ、個人が特定されないことを調査冒頭で説明した。

4. 結果と考察

(1)実態把握のための質問紙調査

まずは、生徒の自己表現の実態を把握するために、質問紙調査を行うこととした。

質問1では、中学生用学級内自己開示尺度（小野寺・河村，2002）を元に15項目を選択し、学級内で特に仲のいい生徒と学級全体に対してそれぞれ各項目の内容をどの程度自己開示しているかを尋ねた。回答は「0. 特に思っていることはない」「1. 自分の思っていることを話さない」「2. 自分の思っていることをあまり話さない」「3. 自分の思っていることを少しは話す」「4. 自分の思っていることをだいたいは話す」の5件法とした。特に仲の良い生徒に対してと学級全体に対しての回答の合計値をそれぞれ計算し、合計値の平均値を算出した。質問は全部で15項目あるため、すべて4だった場合、合計は60となる。学級の中で特に仲の良い生徒に対しては、合計の平均値が38であった。これが学級全体に対しては、合計の平均値は25.9に下がった。この結果から、学級の中で特に仲の良い生徒に対しては、比較的思っていることを話している傾向があるが、学級全体（学級のみんな）に対しては、あまり話せていない生徒が多いことが考えられる。

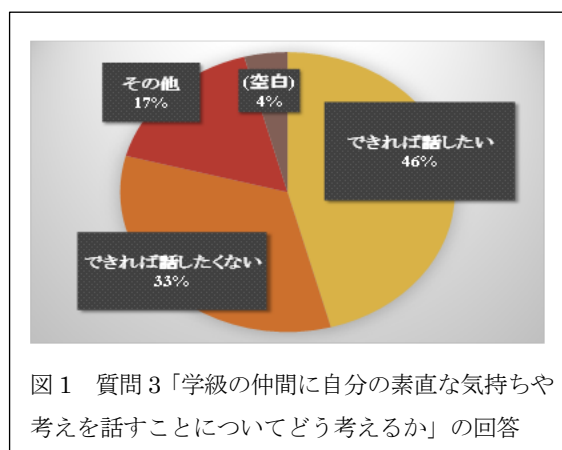
質問2では、高校生アサーション尺度（黒木，2023）を元に、筆者が中学生により身近に感じられると考える15項目を選択し、自身の表現の実態について尋ねた。

回答は「1. 全然当てはまらない」「2. あまり当てはまらない」「3. 少し当てはまる」「4. 非常に当てはまる」の4件法で測定した。回答は1から4点で点数化し、合計値を算出した。1人1人の回答の合計値を算出し、学級の平均値を出すと37.6であった。質問は15項目あるた

め、すべて4と回答した場合、最大値は60となる。ここでは、合計値が低いほど、アサーティブであると言えるが、この数値は半数以上であり、少ないとは言えない。この結果から、現在の学級の状況として、アサーティブな自己表現はあまりできてないことが考えられるため、自分の主張を通しすぎてしまったり、逆に相手に譲りすぎてしまったりしている状況が学級の中にあると予想できる。

最後に、質問3では、学級の仲間に自分の素直な気持ちや考えを話すことについて、「できれば話したい・できれば話したくない・その他」で回答してもらった。結果を図1に示す。

話したいと回答した生徒が約半数である一方で、話したくないと答えた生徒が33%とい



う割合は無視できない。アサーションを推進する中で、話したくない生徒にとっての負担感を軽減する工夫が必要であると考え、自分以外の立場で話すことのできるロールプレイを取り入れることとした。

また、それぞれの回答を選んだ理由を自由記述で尋ねた。話したいと答えた理由の中に出てきた言葉をテキストマイニングにかけたものが図2である。このテキストマイニングでは重要度を表す値を「スコア」という。

られ、自己表現の3つのタイプの名称がカタカナ語で分かりにくかったため、誤って認識している生徒もいたことは課題である。そこで、その後も3つのタイプの名称は毎時確認した。

表2 本研究における授業ユニット

(第1回～第4回)の内容と各回のねらい並びに方法

回	タイトル	実施日	ねらい	内容
第1回	オリエンテーション・3つの自己表現	11月21日 2校時 学級活動 AT	アサーションがなぜ必要か、自己表現の3つのタイプの違いを理解し、自分も相手も大切にアサーティブな自己表現を目標として共通理解する。	学級の自己表現の課題を導入とし、アサーションがなぜ必要かを理解する。攻撃的・受身的・アサーティブという3つの自己表現タイプの特徴を説明し、キャラクターに当てはめてイメージを掴ませる。友人のおすすめ映画が自分は面白くなかった場合にどう話すかをシミュレーションし、自身のコミュニケーションタイプについて考える。
第2回	アサーティブな聴き方・話し方	12月12日 2校時 学級活動 AT	アサーティブな聴き方・話し方のポイントを知り、実践する。	相手に対して「聴いていますよ」と伝えるサインを学ぶ。私メッセージの文章に置き換えた文章を作る。 (排除にこなかった生徒に班長としてどう伝えるか、ロールプレイを行う。)「私メッセージ」で伝える言い方を考える。
第3回	頼む・断る練習	12月25日 2校時 道徳の一部として AT	アサーティブな頼み方・断り方のコツを知り、体験する。	教材文の登場人物になったつもりで、SNSに自分の写真を載せた友達に削除してもらえよう頼む場面と、違法アップロードの動画サイトをすめられて断る場面のロールプレイを行い、感じたことをシェアリングする。
第4回	相手が話してよかったと思える聴き方	1月19日 2校時 学級活動 SST + SGE	・聴き方のスキルを学ぶこと ・聴いてもらう体験の機会とする	第2回の復習として、聴き方のポイントを想起させる。それをスキルとして発揮することを意識して、「私の好きな○○」というテーマで互いの話を聴き合うペア活動を行い、それぞれが感じたことをシェアリングする。

②第2回

第2回では、アサーティブな聴き方として、相手に「あなたの話を聴いています」というサインを示すことを確認すると、そのサインとして「表情・うなずき・体を向ける・目を見る・あいづち・質問する」などのポイントが挙げられた。また、話し方のポイントとしては、「私は」を主語にして文章を作る「私メッセージ」に置き換えて考えるロールプレイを行った。

ワークシートの記述に、「アサーティブな自己表現では、自分の主張をすることと相手の話も聞くことが大切だと思った。話し方や話す内容を工夫することで、相手を傷つけずに、自分の考えを率直に伝えられる。」とあるように、相手も尊重しながら自分の主張をしようとする姿が見られた。

③第3回

本時は道徳の授業の一部として頼む場面と断る場面を設定し、ロールプレイを行ったが、場面設定に規範意識的な側面が強く、生徒たちにとって難しい課題設定となってしまった。

④第4回

第3回では、生徒たちが、アサーティブな自己表現を難しいものだと捉えてしまった傾向があるが、第4回で、「自分の好きな○○」というテーマで、アサーティブな聴き方を意識して聴き合うペア活動を行った。ここでは、生徒たちが互いの好きなものを聴き合う中で、相手が受容的に聴こうとする態度に気づき、聞いてもらうことの良さを実感できたことが考えられる。

(3)事後質問紙調査

事後質問紙調査の結果は以下の図5・6に示した。

1 今後、学級の仲間にもっと自分の気持ちや考えを表現してみたいと思いますか

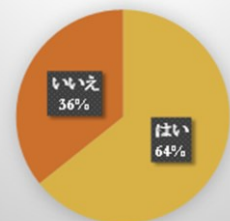


図5 事後質問紙 問1の回答

2 今後、学級の仲間の気持ちや考えをもっと聞きたいと思いますか

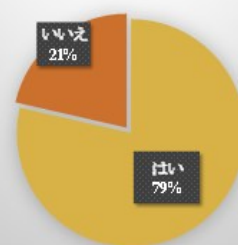


図6 事後質問紙 問2の回答

事前の質問紙調査では、学級の仲間にもっと自分の素直な気持ちや考えをできれば話したいと答えた生徒は全体の46%であったのに対して、

図5では、自分の素直な気持ちや考えをもっと話したいかという質問に「はい」と答えた生徒が64%に上昇した。一方、「いいえ」と答えた生徒の理由には、「話し合いや相談などであれば聞きたいと思うが、それ以外の場合はいろんなことに巻き込まれたくないから」という記述が見られ、聞きたいと思う内容も一部あることが分かる。また、「もう話しているから」という記述も見られ、話すことに対して、否定的でない回答も「いいえ」に含まれていることが分かる。

また、図6では、「今後学級の仲間の気持ちや考えをもっと聞きたいと思いますか」という質問に対して、「はい」と答えた生徒が79%であったことから、相手の自己表現を受容しようとする生徒の姿が現れている。「はい」と答えた理由の例を以下に示す。「あまり話さない人などの考えなどが分からないから知ってみたいと思う」「色々な人の考えを知りたいから。共通の考えの人と話したいから。」「自分が話したときに友達がしてくれたことを返せると活発な話し合いになると思うから」「相手の気持ちや考えを知って、相手のことを良く知り、尊重することができると思うから。話し合いは全員の意見を大切にすることが大事で、自分が思いつかなかった考えを知れると思う。」「みんながどう思っているのか知りたい。そういうクラスがいいから。」このように、自分も他人もその場にあった自己表現ができれば、理解し合って尊重し合える人間関係が築けることを実感したことが考えられる。

質問3として、「学級の仲間と自己表現の3つのタイプ（アグレッシブ・アサーティブ・ノンアサーティブ）や、自分も相手も大切にする自己表現（話し方・聴き方）について学習したことで、安心して自己表現できる学級に近づいたと思いますか。」という問いに対して、「そう思う」「だいたいそう思う」と回答した生徒は全体の93%であった。理由の記述の中にも「学ぶ前よりも話す時や聞く時の姿やあいづちの打ち方、自分の気持ちを表情で分かりやすくすることができるようになった人が多いと思う。

相手の反応があると話しやすくなる。自分の思うことを正直に言っても、考え方が違うことを責められたりすることも無いと思えば、自分の気持ちを他の人によく伝えられる。」とあり、この授業を通して、受け止められる雰囲気を感じていることが分かる。

今回のATの授業を通して、生徒の自己表現の劇的な変化にまでは表れていないことから日常生活への直接的な汎化や影響は、明らかとは言えない。これは、生徒の自己表現の状況が明らかに改善したかというところではないためである。しかし、生徒の意識に「アサーティブ」という言葉が取り入れられた点は成果だと言える。「自分も相手も大切にする」自己表現を学級全体で目指すことで、「学級の雰囲気が前より優しくなった」感じた生徒がいたことは、安心して自己表現できる学級づくりの一端を担っていたといえよう。

5. 総合考察

実践を行う中で、休み時間を過ごす生徒たちの会話の中に「あ、今の言い方はアグレッシブじゃないかな」など、学習した用語が出現する様子が見られた。

授業ユニットとして、単発ではなく複数回の授業を行ったことにより、生徒たちが、アサーションについて想起する回数が増えたことで、生徒たちの自己表現への意識が高まったことが示唆される。

また、学級全体でアサーションについて学んだことで、アサーションの本質である「自分も相手も大切にしたい」という思いが学級の中で共通の目標となり、安心して自己表現できる環境づくりに寄与したと考えられる。

今後の課題としては、今回の授業ユニットでは、1時間の授業として実践したロールプレイをする際の場面設定に、規範意識的な要素が強く、アサーティブに伝えることの意味を実感しにくかったことが考えられるため、より身近な場面設定の吟味が必要であったことが挙げられる。さらに、ATの複数の要素を1時間の中に詰め込んだ形になったことで、生徒にとって

意識する点が複雑になってしまったため、内容を一つに絞って短時間の取り組みを継続していきけるよう、さらに改善を図っていけるとよい。

最後に、本研究は、1校1学級を対象にした実践をもとに調査、分析及び考察を行ったものであり、汎用性は証明されていない。今後は対象の範囲を広げて検討していく必要がある。

6. 引用文献

安藤聡一郎(2023). 中学生の居場所感と場面に
応じた自己表現に伴う感情との関連 応
用教育心理学研究 39 (2), 39-52

中央教育審議会（答申）(2016). 「幼稚園、小
学校、中学校、高等学校及び特別支援学校
の学習指導要領等の改善及び必要な方策
等について」 p54

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2024/2/19
閲覧)

市来百合子・栗本美百合・石井僚・佐藤朗・長
友紀子・川村光・加々見良・市橋由彬・阿
部孝哉・福田真人(2022). 中学新入生への
感情の理解を取り入れたアサーショント
レーニング 次世代教員養成センター研
究紀要 8, 9-15

河村茂雄・武蔵由佳編.(2017). かたさを突
破！学級集団作りエクササイズ 中学校.
図書文化社

國分康孝(1994). 構成的グループエンカウンタ
ー.誠信書房小野寺正己・河村茂雄(2002).
中学生の学級内における自己開示が学級
への適応に及ぼす効果に関する研究 カウ
ンセリング研究, 35, 47-56.

黒木幸敏(2023). スクールカウンセラーが高校
生を対象として実施した講演会の効果に
関する実証的検討 教育実践学研究 24
(2), 53-66

文部科学省 (2022) 生徒指導提要

中村豊・黒木幸敏 (2018) アサーショントレー
ニング教育用プログラムが中学生の自尊
感情に及ぼす効果の検討 東京理科大学

教職教育研究 3, 75 - 84

日本アサーション協会 HP

<https://www.japan-assertion.jp/about-asserion> (2024/2/19 閲覧)

小野寺正己・河村茂雄(2002). 中学生の学級内
における自己開示が学級への適応に及ぼ
す効果に関する研究 カウンセリング研究,
35, 47-56.

小野寺正己・河村茂雄(2002). 資料 中学生用
学級内自己開示尺度の作成と信頼性・妥当
性の検討 カウンセリング研究, 35, 133-
138.

佐藤正二・相川充(2005). 実践！ソーシヤル
スキル教育小学校. 図書文化社

柴橋祐子 (2004). 青年期の自己表明に関連す
る心理的要因についての探索的検討——
半構造化面接を用いて—— 跡見学園女
子大学文学部紀要 , 37, 49-74.

山口豊一・大橋佳奈・掛山裕晋・平田祐子・渡
邊孝祐・野島一彦(2018).固定化された人間
関係にある中学生に対する介入研究—
SGE を用いた効果研究—跡見学園女子大
学附属心理教育相談所紀要 14, 51-65.